

| | |
|------------------|---|
| Title | 編集後記 奥付 |
| Sub Title | |
| Author | 山本, 登 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1952 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.7 (1952. 7) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520701-0075 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尤も難民對策の確立、武器の輸入促進をも含め、これ等の難問を解決して國力を増進するためには、歴大な豫算が必要であつて、結局のところ消極策を採用する以外に、國有林を擔保としてフランス銀行の地方貸付に依存することとなつたが、何處に財源を求むべきかを繞つて當事者間において議論は沸騰し、このことが却つて政府首腦の消極的態度を一段と強化した。

或る時には紙幣の發行が主張された。そして一部の者は發券の効果が期待薄い銀行貸付に依存した場合を凌ぐと誤明した。又鐵道を擔保とする大規模な發行を説得した論者もあつたが、アッシニヤ紙幣の弊害を知る誰もが強く反對したので、發券は結局において斷念せざるを得なかつた。

次に外國借款が問題となつた。戰亂を避けて大陸資本は多く海外に移動し、當時ロンドンには大量の資本が集中してゐて、借款は二分に満たない低利に依つても成立が可能といふ状態であつた。かくして多額の借款が申込まれたのであるが、一部の者は何故かこれを越權行爲と看做して猛烈に反對した。然しかる非難に依つてフランスは國際信用を喪失し、このため經濟力の伸張が妨害されること甚だしかつた。パリーの状態も同様に困難を極めた。プロシヤ軍の包圍に依つて生活の不安は増し民心は動搖した。事態は逼迫して收拾は不可能であつた。

大衆の生活苦は重圍下のパリにおいて特に深刻を極めた。強壯な男子は悉く防衛軍に編入され、その他の者が工作隊とな

つたが、日給は一フランにも満たず、後に増加されて二フラン餘となつたが、兵士の妻は一個の卵を買ふことすら困難であつて、生活の不安から志氣の阻喪が甚だしかつた。かかる事態に對處して當局は食堂を公設し、僅か半フランといふ廉い食事を販買させて大衆生活の安定を企圖したばかりでなく、包圍の當初から極度に不足してゐた肉に關しては無論のこと、麵て統制は麵麩に迄及び、必要な小麦は買上げられて公設倉庫に貯藏され、配給する場合にも燕麥・大麥・秣・米等が混入されることとなつた。これには然し一部の猛烈な反對があつた。麵麩の統制を非難するこの人々に依れば、絶對に不可欠なこの食料を制限することは神聖な生存權の侵犯にも等しいのであつて、絶對に不可侵なこの神聖な權利に依つて誰もが更に大量の麵麩を請求することが出来たのであつた。然しかる内部對立が計畫の極端化の傾向を抑制したことは、不安なこの首都においても地方におけると全く同様であつた。

「共和國は一八七二年には侵入軍を撃退することが出来るであらう。このために採用した國防政府の政策は、以上において知られる如く、最初に宣言された經濟自由の原則と全く相違した保守主義であつた。しかもその保守主義は急進分子に對する恐怖と、經濟統制の失敗に對する懸念とに依つて抑制された謂はば意識した保守主義であつて、經濟に對するかかる態度が後暫らくフランスにおいては政策決定の上の基調となつたのであつた。」

(渡邊國廣)

編集後記

戦後の世界經濟の發展は、既にその第一段階および第二段階を経て、現在は第三段階への移行期乃至既に第三段階に入つたものと見られる。戦争直後の世界恒久平和の樹立という理想追求の顯著であつた第一階段、冷戦の展開を背景として、著しく現實主義化した第二段階の後に、第三段階は謂はば相對的安定期たることが望まれたのである。第一次世界大戰後の經驗に徴しても、このことは必ずしも不可能ではないと思われた。蓋し二つの陣營への分裂は次第に明確化した。それぞれ陣營内において可成りの經濟復興が具現され、少くとも工業生産水準は、多くの國において戦前のそれを越えたのである。

しかしながら世界經濟における經濟力發展のアンバランスは聊かも解消されなかつた。加うるに冷戦の激化は、やがて朝鮮動亂を一つの契機として、世界的な軍擴經濟の發足を不可避とした。戦後數年に於いて相對的にもせよ安定期を迎えるのでなく、寧ろ逆に再軍備の時期を迎えるといふことは、正しく世紀の悲劇といわざるをえない。何等かの手段によつて本格的な世界戦争への擴大を阻止せんとし、平和への念願が高まるのも蓋し當然であらう。

二大勢力の對立の陰に、東西貿易促進の叫びが聞かれるのも無理からぬことであり、わが國においては、それは中共貿易推進の聲に見出される。政治的、思想的對立を別として、東西兩陣營の間に經濟原則が適用されたいはひきれない。しかし現實には餘りにも多くの經濟外的要因が働きがちである。とすればこれら諸要因の作用を出来るだけ減少することは、人類全體の希望ではなからうか。われわれは、先づお互に相手の主張を聞く寛容な態度を以て臨むべきであらう。

(山本登)

| | |
|----------------|------------------|
| 昭和二十七年六月二十五日印刷 | 昭和二十七年七月一日發行 |
| 第四十五卷 | 第七號 |
| 定價 七拾圓 | 送料 四圓 |
| 編輯者 高村象平 | 發行所 東京都港區芝三田豐岡町八 |
| 印刷所 圖書印刷株式會社 | 川口芳太郎 |
| 豫約購讀料 | 一年分 金八四〇圓(送料共) |
| | 半々年分 金四二〇圓() |
| 發行所 | 東京都港區芝三田三丁目 |
| | 慶應義塾大學經濟學部研究室内 |
| | 慶應義塾經濟學會 |